

## 『みんなの機内食』

今回は、食文化に注目し、多文化社会における多様な食文化への対応や文化摩擦について考える。

「機内食・ドットコム」というウェブサイトがある (<http://www.kinaishoku.com/>)。『みんなの機内食』という題で書籍化もされている（機内食ドットコムRikiya2012）。これをみると、世界各国の機内食はそれぞれの地域の食文化を反映していて興味ぶかい。そして、機内食ではチャイルドミールやベジタリアン食なども提供されていることがわかる。

西江雅之（にしえ・まさゆき）はイスラム教では豚肉がタブーであること、インドのヒンドゥー教徒は牛肉をたべないこと、ベジタリアンの存在を指摘し、世界の機内食についてつぎのようにのべている。

このような異質な文化を持つ人々に、日常的に対応しなければならない職業の筆頭は、航空会社の仕事です。国際線には様々な宗教の信者が乗客として乗ってくるわけですから、会社ではあらかじめ客に食事の種類を確かめておいて、それを用意しなければならないということになるのです。

意外に知られていないことですが、イスラム教では豚肉はいけませんが牛肉や羊肉ならばどんな料理でもよい、というわけでもありません。イスラム教の教えに従った方法で屠殺した牛肉や羊肉だけが、食べることを許可されます。したがって、ヨーロッパの航空機などでは、イスラム教徒の機内食を見ると、“イスラム教の教えに従って料理をした……”といったような但し書きがついているカードが、牛肉や羊肉には付けてあるのが普通です。豚肉は、もちろん運ばれてくることはありません（にしえ2005:20-21）。

ここで日本航空（JAL）のサイトをみてみよう。

まず、「JAL ユニバーサルデザイン」というページがある。 <http://www.jal.com/ja/ud/>

そのなかに「機内にあるユニバーサルデザイン」というページへのリンクがはられている。 <http://www.jal.com/ja/ud/inflight.html> そして、ユニバーサルデザインのひとつに機内食をあげており、つぎのような説明がある。

JALでは、健康に気を配られているお客さまや宗教にかかわるご要望のあるお客さまのために、様々な機内特別食を取り揃えております。

また赤ちゃんや小さいお子さまのお食事もございますのでご遠慮なくお申し付けください。

さらに「機内特別食」のページにリンクがはられている。 <http://www.jal.co.jp/inter/service/meal/special/menu/> そこにあげられているのは、「ベジタリアンミール（卵と乳製品の入っていないお食事）」「ベジタリアンミール（卵と乳製品の入っているお食事）」「ベジタリアン・ヒンズー・ミール（アジア風）」「ベジタリアンミール（生野菜）」「ジャイナ教食（菜食）」「ヒンズー教徒食」「モスLEM教徒食」「ユダヤ教徒食」「乳幼児食」「チャイルドミール」「糖尿病食」「低コレステロール食/低脂肪食」「その他の機内特別食」である。その他の機内特別食には、低塩分食、シーフード食、フルーツのみのお食事などがある。

一般のレストランでこれだけの対応をとることはむずかしい。しかし、ニーズはある。そのため、たとえば日本に旅行にきたベジタリアンはインド料理店などのエスニック料理店を利用している。インドカレーのお店では、ベジタリアンメニューを用意していることがおおい。なかにはハラール（「イスラム教の教えにしたがった方法で屠殺した牛肉や羊肉」のこと）に対応している店もある。トルコ料理店、パキスタン料理店などもハラールに対応している。

『みんなの機内食』をみると、たとえばインドの航空会社（ジェット・エアウェイズ）の機内食の選択肢は「ベジタブルとノンベジタブル」だったという報告がある（機内食ドットコムRikiya2012:79）。インドのようにベジタリアンがあたりまえの地域では、ベジタリアン食は「特別食」ではなく、あたりまえの選択肢になるということだ。

台湾では菜食料理を「素食（スーシー）」という。素食の店は街中にたくさんある。台湾には朝食を提供する食堂が多い。セルフサービスのある店では「素（スー）」と「葷（フン）」の2種類が用意されており、自分が食べたいものを選ぶようになっていた。ベジタリアンがマイノリティである社会では「非菜食」には名前はない。菜食も普及している社会では非菜食にも名前がある（葷）。そのような社会では菜食は「特別（特殊）なもの」ではなくなる。

## 食文化と自文化中心主義

人が移動し、交流がすすみ、食文化の多様性をきちんと認知し、対応することがもとめられるようになってきた。たとえば、学校の給食をどうするかという問題がある。また、豚肉や牛肉を使用していることを情報開示する必要性も生じてくる。そこで第一に必要なのは、まず、イスラム教徒は豚肉をたべないということをおぼえておくことだ。とくに、国際的なイベントを開催するときは、その点に十分注意する必要がある。

…ムスリムが宗教上の理由から豚肉を食べないということは、日本でも意外に知られていないようだ。かつて、九州のある市でアジア諸国が参加する国際的なスポーツ大会が開かれたとき、主催者である市が、アジア各国からやって来た選手たちに歓迎の意を表すために、土地の名物である豚骨ラーメンを振る舞ったことがある。ところが、選手のなかに多くのムスリムがいて、知らずにそのラーメンを食べてしまった。あとで、たいへんな騒ぎになったことは、いうまでもなかるう。…中略…

この豚骨ラーメン騒動の根底にあるのは、自文化中心主義 (ethnocentrism) である。自分たちが食べているものだから、まさかそれを食べない者がいるとは思えない。そうした思い込みがトラブルを引き起こしたといえよう (しみず2006:54-55)。

アレルギーに関する食品表示は、すこしずつひろまってきている。肉食に関しても、豚肉や牛肉、あるいは動物性の食品をふくんでいるなど、情報開示をしていく必要がある。食品に関する情報開示は、消費者の知る権利を保障するということだ。

食文化をめぐる自文化中心主義の問題として、つぎのような事例もある。

世界の飢えた人びとへの食糧援助にかかわる異文化研究は、アメリカ合衆国の文化人類学者を中心として、1930年から1940年代に取り組みが開始された。よく引き合いに出される例は、ミルクの国際援助である。アメリカやカナダは、食糧不足の国々に援助物資として粉ミルクを届けた。しかし、コロンビアやグアテマラではそれを漆喰塗り (しっくいぬり) に使い、インドネシアでは下剤として使った。西アフリカの一部では、それを悪霊の食べ物と信じた。その他の多くの人びとは、捨ててしまった。さらに、飢えを減らすどころか、ミルクが腹痛や嘔吐のような病気を引き起こす人びともいた。1965年に、それがミルクを消化できないラクターゼの欠乏によるアレルギーであり、ミルクの飲めない民族も多いことが明らかになったが、その後もしばらく粉ミルク援助が続けられたという。それは、ミルクを日常的に飲む人びとのエスノセントリズム (自民族中心主義) を示す一例でもある (かわい2006:32)。

自分たちにとって有用であるからといって、ほかの人にも有用であるとはかぎらない。しかし、人はしばしば自分 (たち) の基準で判断してしまう。そのことに注意するためにも、「多様性」についての理解が必要なのである (ミルクが消化できない症状については、ウィキペディアの「乳糖不耐症」にくわしい)。

食べ物に対する考え方だけでなく、体質にも違いがあるという点に注意する必要がある。文化の多様性だけでなく、からだの多様性に対応できる社会にしていくことも、多文化社会の課題であるといえるだろう。

## フードピクト

食文化の多様性に関連して紹介したいのが、フードピクトである。これは、「インターナショナル」という団体が、たべものに関する情報 (食品表示) をピクトグラムで表現してまとめたものである (<https://www.foodpict.com>)。

宗教や思想、生活スタイル、アレルギーなどで「たべないもの」があるとき、ピクトグラムで食品表示があれば安心してメニューをえらぶことができる。多様性を尊重するという意味でも、重要なとりくみだといえる。

## 食文化とナショナリズム

現在、「なにをたべるか」「なにをたべないか」について、価値観が多様化している。産地を気にする人、無農薬/低農薬の野菜をえらぶ人、気にしない人。白米をたべる人、玄米をたべる人、雑穀米をたべる人。鶏肉はたべないという人。牛肉や豚肉はたべないという人。さまざまである。

自分がたべないだけでなく、ほかの人も「たべないでほしい」「たべるべきではない」と主張する人もいる。肉全般や、クジラ、イルカ、イヌなどである。

日本でもあまり認知されてこなかったが、日本では和歌山県でイルカ漁をしている。食用にするのと水族館に販売するのが目的である。『ザ・コーヴ』というドキュメンタリー映画に詳しい（イルカ漁を批判する側の視点によるもの）。現在では、人間とイルカの交流がすすみ、「イルカをたべてほしくない」という主張が一方にある。地元ではイルカ漁はずっとなつづけられてきたことであり、かんたんにやめるわけにもいかない。

日本でも、捕鯨については許容する人が、イルカ漁については否定的であることがある。捕鯨にもイルカ漁にも反対している人もいる。

今の日本ではイヌをたべる習慣はない。ただ、歴史的にはイヌをたべる習慣は存在した（たにぐち2012）。歴史をふまえるなら、犬食という日本の伝統文化を復興しようとする活動があっても不思議ではない。しかし、そのような議論はまったくない。そもそも、三味線の材料として猫や犬の皮を使用していることを知っている人はすくない。

その一方で、クジラをたべることについては議論がある。「日本の伝統文化であるから捕鯨をつづける」という主張である。「伝統だ」と認識され主張されている文化と、わすれられている文化がある。このちがいは、なんだろうか。ひとついえるのは、ナショナリズムを刺激されたかどうか、ということだろう。つまり、捕鯨については外国からの批判があるため、たくさんの「日本人」のナショナリズムを刺激している。その一方で、犬食については外国からの批判という要素がない。そもそも、過去に存在したことすら認識されていない。現在、「日本人」がイヌを日常的にたべないのは「自主的な選択」の結果としてしか想定されていない。

クジラの場合は、じっさいにたべたことがあるという人がたくさんいる。だから身近に感じられるということがあるだろう。クジラをたべるのは「日本の文化」と感じやすいということだ。逆に、クジラをたべたことのない人は、日本文化といわれても、しっくりこないかもしれない。しかし、クジラをたべてきた「日本人」にとっては、「日本人」がクジラをたべるのは「あたりまえ」なのである。

現代日本では、パンをたべる習慣がひろく定着している。これは「日本人」が主体的に「えらんだ」といえるだろうか。歴史をみれば、そうではない。日本でパン食がひろまったのは、アメリカの占領政策の影響がある（すずき2003）。食文化の変化には社会的な背景がある。

文化相対主義の視点では、文化には優劣はないという。しかし、どのようなことであれ、文化と認識すれば、なにもかも正当化できるのか。死刑や拷問、こどもにたいする虐待など、文化によって認識にちがいがあがる。つよく否定する文化と許容する文化がある。そして、許容している文化圏の内部でも議論が対立している場合がある。

これを「どちらでもよい」とはしないからこそ、国連の人権理事会やアムネスティインターナショナルなどの国際的な活動がある。

朝鮮半島や中国などではイヌをたべる習慣がある（たべない人もたくさんいる）。それにたいして批判する議論がある。たとえば韓国の国内でも反対する人がいる。イム・ジョンシクは韓国の犬食を「文化相対主義」によって擁護する議論について、つぎのようにのべている。

文化相対主義は「フランス人は犬をたべない。一方、中国人と韓国人は犬をたべる」というように文化の多様性を記述する記述的な性格をもっている。しかし、文化相対主義に依存してわれわれの犬食文化を擁護しようとする人たちは、もう一歩すすんで「ほかの社会集団の慣習について批判するのは間違っている」、あるいは「ほかの社会集団の慣習には沈黙するべきだ」と主張していることに注目しなければならない（イム2002:18—あべ訳）。

議論は議論として、あっていいはずである。しかし「沈黙するべきだ」とまで主張してしまうことがある。これはおかしい。超越的な立場からある文化を否定し、おとしめるのは、越権行為といえるだろう。しかし対等な立場で、それぞれが自分の主張をのべるのであれば、なにも問題はないのではないだろうか。

イム・ジョンシクは「文化であるという点だけで、それがどのような内容のものであると「アンタッチャブル」という特権をえることはできない」と結論づけている（212ページ）。

ケネス・ガーゲンが社会構成主義の視点から、相対主義という超越した立場はありえないと指摘している。

そもそも相対主義という立場はありえません。いかなる価値観も支持することなく、競合するさまざまな声のもつメリットを比較して優劣を決めることのできるような、超越した立場は存在しないのです（ガーゲン 2004:340）。

「文化である」ということは、なにも「善である」とか、「ただししい」ということを意味しない。文化という概念は、なにかを正当化するために使用するのではない。文化という概念は、この社会をとらえる（解釈する）ための、ひとつのメガネである。世界を言語化するための、ひとつの表現である。石川准（いしかわ・じゅん）が指摘するとおり、「文化という考え方は出発点であって終着点ではない」のである（いしかわ1999:114）。

こうした文脈のなかで、「文化ってなんだろう」という問いなおしが必要になるのだ。

## 現実をふまえる

内澤旬子（うちざわ・じゅんこ）は世界のたくさんの地域の屠畜風景を取材し、『世界屠畜紀行』という本にまとめている。第7章では「韓国の犬肉」をとりあげている（うちざわ2011）。

『いのちの食べかた』というドキュメンタリー映画をみてもわかるように、現在社会の屠畜は流れ作業によるものであり、手順が合理化されている。その一方で、日本では屠場（とじょう）労働者にたいする差別がのこっている。スーパーにいけば食肉がある。だれもが日常的に目にしている。しかし、その肉がどのようにできあがったのかは、ほとんど注目されていない。

東京の品川駅のちかくに東京都中央卸売市場食肉市場のセンタービルがあり、その6階に「お肉の情報館」がある。そこで食肉がどのように生産されているのか、くわしく知ることができる（かわもと2003）。

もし、屠畜の現場をじっさいに見学したり、解説をきいたりする経験をもてば、イスラム教徒がなぜハラールにこだわるのか、あるいは、捕鯨や犬肉をめぐる議論についても理解しやすくなるかもしれない。

人の生活が動的なものである以上、文化も動的なものである。その時代、その地域の価値観に左右され、また国際的な動向の影響を受ける。現に変化しつつある文化を、一面的に固定的にとらえてしまうと議論のすれちがいをまねいてしまう。きちんと現実を把握したうえで、みずからの意見を表明するようにしたい。それが、自分の発言に責任をもつということだ。

## 国を単位にして食文化を語ることにについて

「日本人は馬を食べるが韓国人は馬を食べない」という言いかたがある。日本でいえば、長野や熊本では、馬を食べる文化は有名である。とはいえ、「日本人」のなかにも、馬は食べないという人は当然いる。そしてさらに、韓国の済州島には馬を食べる文化がある。国を単位にして文化を語ることに、そもそも無理があるのだ。

あらためて捕鯨についていえば、関口雄祐（せきぐち・ゆうすけ）が指摘しているように、「多くの国に捕鯨をする文化があり、日本にもある」（せきぐち2010:173）のであって、「捕鯨は日本の文化」というのは、ことばの表現、文化の認識としていいすぎである。捕鯨文化はたとえば韓国にもあるし、日本全国に根づいているわけでもない。関口はつぎのように説明している。

捕鯨に強く関わってきた地域があり、別の地域では年に数回の鯨肉の食文化があり、あるいはまったく鯨に関わることのなかった地域がある。これが文化の多様性だ。各個人の背負う文化が異なる以上、「日本の文化」を総意として表そうとするのが無理なのだ。たとえば、日本には昆虫食の文化を持つ地域がある。同様に、豚足を食する地域がある。それらと同列に鯨食する地域があるという姿勢で良いのではないだろうか（172-173ページ）。

地域にそれぞれ文化があり、同時に、その地域は世界のなかにある。文化の名のもとに食文化を肯定する議論は一定の理解がある。だからこそ、先住民による捕鯨の権利は保障されている（「先住民生存捕鯨」という）。ただ、マグロやウナギの食べすぎ問題のように、持続可能性を度外視した「食文化」を放置してよいわけではないだろう。論点は文化だけではないのだ。

## 引揚げ体験と食文化

福岡には、「博多の食と文化の博物館」がある。いわゆる明太子博物館である。福岡で明太子を製造、販売してきた「ふくや」による博物館である。その展示を見ると、明太子とは、植民地時代に朝鮮半島で生まれ育った日本人引揚者（ひきあげしゃ）が日本にもちこんだものとされている。ふくやの創業者については『めんたいぴりり』というドラマや映画が制作されている。

明太子とおなじように、中国大陸からの引揚者がもちかえった食文化として、ギョーザがある。博多の明太子、宇都宮ギョーザというように、いまでは地域文化の象徴になっている。そうした食文化にも、人の移動の歴史がぎざまれているのである。

人と人が交流するなかで、文化と文化が接触し、伝わっていく文化もある。文化は共有財産であり、明確に「どこのもの」「だれのもの」ということはできない。

多様な価値が共存している現在社会では、食生活も多様化している。その社会において、個人に選択の自由がどれだけ保障されているのか。食文化のありようは、多文化社会をうつしだす鏡であるといえる。たとえば、給食をすべて残さず食べるように強要するような学校文化は暴力的である。みんな同じことを要求するという意味で抑圧的でもある。

### 均質的な人間像、他者化、そして「特別あつかいはしません」

だれしも偏見があり、「人間とはこのようなものだ」という想定をもって生きている。その想定からおおきくズレた人に出会うと、とまどう。不快にさえ感じてしまう。しかし、それはそれまでの人間像に偏りがあったからこそ感じてしまった不快感である。人はしばしば、自分の想定を絶対視し、そこからズレた人を他者化する。「ふつうではない存在」、「特殊な人」とみなす。そのとき、自分の許容できる範囲において、「特別な配慮」だといって支援したり、例外をみとめることがある。しかし、許容範囲をこえた要求があれば、「特別あつかいはしません」と宣言し、拒否してしまう。そのようなことが、じっさいにある。

### 配慮の平等

石川准（いしかわ・じゅん）は、「配慮の平等」という視点を提示している。石川は、駅の階段とエレベータを比較してつぎのように論じている。

多くの人は「健常者は配慮を必要としない人、障害者は特別な配慮を必要とする人」と考えている。しかし、「健常者は配慮されている人、障害者は配慮されていない人」というようには言えないだろうか。

たとえば、駅の階段とエレベータを比較してみる。階段は当然あるべきものであるのに対して、一般にはエレベータは車椅子の人や足の悪い人のための特別な配慮と思われている。だが階段がなければ誰も上の階には上がれない。とすれば、エレベータを配慮と呼ぶなら階段も配慮と呼ぶなければならないし、階段を当然あるべきものとするならばエレベータも当然あるべきものとしなければフェアではない（いしかわ2008:93）。

石川は「停電かなにかでエレベータの止まった高層ビルの上層階に取り残された人はだれしも一瞬にして移動障害者となる」と指摘している（93ページ）。そして、つぎのようにまとめている。

要するに、障害は環境依存的なものだということである。人の多様性への配慮が理想的に行き届いたところには障害者はおらず、だれにも容赦しない過酷な環境には健常者はいない。そして中間的な環境には健常者と障害者がいる。そしてそのような中間的な環境では、多数者への配慮は当然のこととされ配慮とはいわれないが、少数者への配慮は特別なこととして意識される（94ページ）。

これが、ある配慮が「特別あつかい」として意識され、「弱者のため」というパターンリズムがとりこまれるメカニズムである。その対処が「特別」として見なされているかぎり、それは「多数派の理解」に大きく左右されてしまう。場合によっては、「逆差別」だといって問題視され、攻撃をうける場合もある。人を区別し、敵味方でとらえる視線が、そのような態度をうみだしている。そして、そのような他者に厳しい社会は、息苦しいものである。

必要なだけ、必要なときに、あたりまえのサポートをする社会では、「特別あつかい」などという認識をもつこともない。そのような社会であれば、必要なときに、必要なだけ、自分にとって必要なことを要望することができる。

食品表示、肉のないメニュー、豚肉あるいは牛肉をつかっていないメニュー、アレルギーに配慮したメニューなど、さまざまなニーズがある。それは、わがままではないし、特別なことでもない。

## 参考文献

- 荒川弘（あらかわ・ひろむ） 2011～ 『銀の匙（さじ）』小学館（既刊14巻） アニメ版、実写映画版もある。
- 石川准（いしかわ・じゅん） 1999 『人はなぜ認められたいのか—アイデンティティ依存の社会学』旬報社
- 石川准 2004 『見えないものと見えるもの—社交とアシストの障害学』医学書院
- 石川准 2008 「本を読む権利はみんなにある」上野千鶴子（うえの・ちづこ）ほか編『ケアという思想』岩波書店、91-106
- 伊勢田哲治（いせだ・てつじ） 2008 『動物からの倫理学入門』名古屋大学出版会
- イム・ジョンシク 2002 『犬肉をたべようが、たべまいが?』ロテムナム（韓国）
- 内澤旬子（うちざわ・じゅんこ） 2011 『世界屠畜紀行』角川文庫
- ガーゲン、ケネス J. 東村和子訳 2004 『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版
- 河合利光（かわい・としみつ） 2006 「序章 異文化の学び方」河合編『食からの異文化理解』時潮社、15-35
- 川元祥一（かわもと・よしかず） 2003 「と場の労働と食肉文化」『部落解放』3月号、108-116
- 機内食ドットコム Rikiya 2012 『みんなの機内食』翔泳社
- 島村恭則（しまむら・たかのり）編 2013 『引揚者の戦後—叢書 戦争が生みだす社会 II巻』新曜社
- 清水芳見（しみず・よしみ） 2006 「食のタブー 何を食べ、何を食べないのか—ムスリム社会の場合」河合編『食からの異文化理解』時潮社、39-55
- 白石壮一郎（しらいし・そういちろう） 2011 『文化の権利、幸福への権利—人類学から考える』関西学院大学出版会
- 鈴木猛夫（すずき・たけお） 2003 『「アメリカ小麦戦略」と日本人の食生活』藤原書店
- 関口雄祐（せきぐち・ゆうすけ） 2010 『イルカを食べちゃダメですか？ 科学者の追い込み漁体験記』光文社新書
- 千松信也（せんまつ・しんや） 2012 『ぼくは猟師になった』新潮文庫
- 谷口研語（たにぐち・けんご） 2012 『犬の日本史』（第8章「犬を食う人、人を食う犬」）吉川弘文館
- 鶴田静（つるた・しずか） 2002 『ベジタリアンの文化誌』中公文庫
- 西江雅之（にしえ・まさゆき） 2005 『「食」の課外授業』平凡社新書
- 西江雅之 2013 『食べる 増補新版』青土社

## 学生への質問

- ・日本の学校文化において、よく問題になるのが給食に関する事です。自分が体験したエピソードを紹介してください。これがイヤだった、こまったということ、あるいは、逆によかったこと。「給食」ではなかった例についても。
- ・アレルギー性食品などについて、きちんと情報開示することは大事なことです。まだまだ不十分なところがあります。なにか具体的なエピソードがあれば紹介してください。

## コメントの紹介

手話にも日本手話、アメリカ手話、中国手話など様々にあるという話をこの前聞いてはっとさせられました。ですがよく考えれば国や地域によって様々な手話があることは当然です。日本手話とアメリカ手話の関係は日本語と英語のかんけいと同じではないかと思えます。（同じ「音声言語」「手話言語」という共通点が見られるという点において）。ところが私は手話を、何か言語とは離れた特別なものとして一括りにしていたからこそ、「手話は世界共通である」というような、よく考えればありえないような理解を抵抗なく受け入れていたのだと思いました。

【あべのコメント：手話は、ろう者が集団を形成したら、いつのまにか誕生するものです。ろう学校をつくったり、あるいは、遺伝性の聴覚障害の多い島など、ある程度のコミュニティができた場合に。そして、一度誕生した手話は、完成された言語であるからこそ、伝播していく力が強い。一度身につけた手話は母語（第一言語）となるので、簡単にほかの地域の手話を身につけることは困難で、学習が必要。音声言語がそうであるように。】

旅行の最中にSAPAに行くと、多目的トイレは自動ドアになっていてなんでこだけ自動なんだろうと思っていましたが、車いすを使っている人や手が使えない人に配慮されたバリアフリーを導入しているからだったのだと今日の授業をきいて分かりました。思い返してみると少し低くなった手洗い場や段差のない入口、渋滞情報は音声と字幕どちらも流れている、などその時は気にもとめていませんでしたが、色々な人が同じサービスをうけられるように工夫されているのだなと思いました。…後略…

…本当にみんなが使いやすいものを作るには、色々な手段を組み合わせる必要がある。今回じゃんけんの話が出たが、「誰もが参加できるじゃんけん」とは、完全に出来上がることはなく、参加をする人によって、使い分ける必要があると感じた。…後略…

…車いす専用の机も少ないし、授業と授業の間の休憩時間、移動時間も10分では体に障がいのある人には短いのでは？と思います。

【あべのコメント：机に関していえば、図書館によっては車いすの人用の席に、高さが調整できる机が用意されていることがあります。車いすの大きさは、人ごとにちがうので、机の高さを調節できると、とても助かるのです。】

私は割と体が小さい方です。服屋さんによってはM、Lしかおいてなかったり、フリーサイズしかおいてなかったりして気に入ったものが買えないこともありました。でも最近はSやXSをおいてくれるお店がふえたと感じます。渡辺直美さんのブランドのPUNYSでは逆に6Lまでの大きいサイズがそろえてあったり、より多くの人が自分のきたい服をきれるようになっていると感じます。すべての人が使いやすいようにデザインするのは難しいことだと思ったけど、選択肢を増やしていくことは可能だと思った。…後略…

…私も足や腰に多く問題を抱えていて、17歳の時にオーダーメイドのインソールを作ってもらったことがありました。発泡スチロールに似たものが詰められた箱の中に足を入れて型をとり、持ち帰って一つひとつ手作りしているようです。…中略…最近では、女性がフォーマルな場でパンプスをはくことに対しての是非も問われています。インソールを作ってくれた人は、3cmかかるとが高ければ体重の負荷の70%がつま先にかかってしまうとっていました。健康に悪いことは自明なのに今まで何の疑問を持たれずにきたことが私には不思議でなりません。健康を犠牲にしたフォーマルさに果たしてどれ程の価値があるのでしょうか。

ものの形を人にあわせるという内容でクロックスの話聞いて、枕を思い出しました。過去に寝ている時に首を痛めたことがあるため、枕だけを扱っている専門店に行ったことがあり、その人だけの世界で1つの枕をつくれることに驚きました。首の形、動きにそうもの、深くしずむもの、中身の素材など、バリエーションがありました。…中略…みんな、多様であると考え、容姿、心のバリアフリーという観点から『The Greatest Showman』という映画をおすすめします。…後略…

…最近、情報化が進み、とても便利になっていると思うが、何でもスマホでやれるため、高齢者の方には、本当に便利になっているのだろうかと思うことがよくある。病院などでは、待ち時間がアプリでわかったり、お薬手帳のかわりにアプリで管理できたりする。高齢者の方の多い施設では、もっと他に、配慮することがあると思った。…後略…

“視覚が過敏な人”は、白い紙のノートが光って見え、使いにくいので、薄緑色の紙のノートを探している（以前使っていたが、最近店などで見つからず、買えなくなったので困っている）という話を見たLoftさんが、そのノートを店と、オンラインで売り始めた。という流れを最近見ました。そのような悩みを持った人がいることは、これを見て初めて知りました。Loftさんの対応が早く、感動しました。…後略…

…私は知的障害者の方の生活を支援するバイトをしている。あるひとりの利用者さんは「どちらにしますか？」とたずねると「こっち！」とこたえるが、それが本当に本人の意思で選んだのか、単に「こっち！」と指さす遊びとしてやっているのか分からなかった。そのため、朝食のパンかごはんかを選択する際に色々な方法を試してみるようになった。絵で🍞🍌と札を用いた時はパンを選んでもほとんど残すことが多かった。次に実物を見せて選んでもらうと、残すことはすくなくなった。今、ファミレスのメニューのように実写の札を利用して、試している。結果が分かれば、利用者さんが意思を伝えられるように、こちらが行うべき工夫がみえてくると思う。

【あべのコメント：実物をみせることを業界用語で「オブジェクト提示」といいます。】

-----  
ウェブアクセシビリティの項目で「画像に代替テキストをつける」と記述について、先代の絵巻き物が思い出されました。たとえば中古の『うつほ物語』には各場面の絵に必ず『絵解き（えとき）』と呼ばれる解説文が、本文とは別に添えられています。より物語を理解してもらうため、絵の中のちょっと分かり辛い部分に細かい説明（「男は巻き物を持っている。女は驚いている。」など）があり、現代のウェブページ上の画像にもこの『絵解き』を入れるべきなのだと思います。…後略…

-----  
…読み上げ機能に関連して、R-1グランプリ2017の優勝者の濱田祐太郎さんのネタを思い出した。視覚障害のある濱田さんは、ニュースを携帯の読み上げ機能を使って知るそうだが、加藤一二三九段（ひふみくだん）のことを携帯は加藤一二三九段（せんにひやくさんじゅうきゅうだん）と読み上げたと言っていた。当時は僕もその話で笑っていたが、今思うと誤った情報を与えてしまっているの、情報格差が起こってしまっているのではないかと思う。この差をなくすために、携帯の読み上げ機能の正確さを上げるべきだと思う。

【あべのコメント：データベースを更新しつづけると、精度は上がるといえますが、同じ漢字でちがう読みの人がたくさんいます。なので、わたしがやっているように、人名漢字にはふりがなをふることが必要だろうと思います。】

-----  
…「ノートテイク」ということばをきいて、『ひだまりが聴こえる』という本を思い出しました。面白いのでおすすめです。

-----  
…最近レポート提出の前にWordのよみあげ機能を使って最終チェックとして用いている。

-----  
私はInstagramをよく利用するのですが、自分の投稿に代替テキストをつける機能があります。ですが、代替テキストをどのように書いたらいいのかわからず、どうやって見るのかもわからないので使ったことがありません。代替テキストはウェブアクセシビリティにつながり、自分でも簡単にできるものだと思うので、使い方を調べて積極的に利用していきたいです。…後略…

-----  
…読み上げのアプリがあるのは、障害者の人にとっても有効なものであると思いますが、まだまだAIによる読み上げは無機質的に感じたり、読み間違いもあるのでより発展していく今後が気になります。声の調子はコミュニケーションの重要な要素であると思うためAIの読み上げも声の調子がより幅広くなって、自分の伝えたい用件だけでなく、気持ちまでも表現してくれるAIが出てきたらいいなと思いました。…後略…

【あべのコメント：合成音声は、読書などのため使用する場合と、自分の声として使用する場合があります、人によって使用する意図がちがいます。読書のために使用している人のなかには、合成音声は淡々と読み上げることを評価している人がそれなりにいます。むしろ、プロの朗読は感情のつけかたが過剰すぎていやだという場合もあります。日常で使用している人と、そうでない人では、「いい合成音声」についてのイメージがことなるということでしょう。】

-----  
[ユニバーサルデザインについて] …体が不自由な人だけでなく、体が不自由でない人にとっても優しいものになっているということを最近になって意識し始めた。今まではユニバーサルデザインは体が不自由な人向けと捉えていたが、重い荷物を持っているときはスロープが役立つし、お風呂に入るときに眼鏡を外して良く見えないため、シャンプーとリンスをボコボコした部分で判断したり…。後略…

【あべのコメント：ユニバーサルデザインは、「人にやさしい」ということなので、多くの人にとって助かるもの。「特別なもの」ではないのです。】

-----  
Siriなどは、人が楽に検索や連絡をできるようにする、怠惰な機能だと思っていましたが、盲目的な方を目的にしていたのかと今更気づき、自分はマイノリティーに対する意識が足りていないのだと実感しました。…後略…

【あべのコメント：「特別に」「見えない人のために」実装したものではないです。いろんな人が使えるというだけ。】

-----  
…私が履いたことのある靴の中で“ポンプヒューリー”という靴があるのですが、靴を履いた後に空気を入れることでその人の足にフィットするようになるつくりで疲れにくいのでとてもオススメです。

…小学校の生活科の授業で、バリアフリーについて学んだことがあります。車椅子に乗ってみる、アイマスクをつけて学校を一周する、などがありました。私は音訳（音声通訳）を選びました。広報を毎月音訳して福祉施設などにサービスで提供している団体が主催していました。教科書のリレー読みで一文だけでも間違えず、つまり読むのは難しいのに、広報は慣れてないので録音するまで何十回も練習しました。…後略…

【あべのコメント：音訳というのは点訳（墨字の文章を点字にすること）と対（つい）になった表現です。音声通訳の略語ではないです。】

たしかにこの授業を申請するときも実は先生の名前がひらがなで書いてあってびっくりしました。私も外国人なので日本人の漢字でできた名字がとても難しいです。最近雨がたくさん降ったことがあるけど防災速報が漢字ばかりだからもし私のおばあさんが外国で自然災害に遭うなら自然災害メールを読めないし、避難できなさそう。

【あべのコメント：20才のときから名前はひらがなで書いてます。こどもにもわかるし、みんなに覚えられます。】

私は話すのが遅い方で、話す時に、途中で少し間を空けてしまったりすることがあります。そういった時に、せっちな人と話すと、相手がわたしの言おうとしていることを早とちりして、話を進めてしまったりすることがあります。でも私が言いたかったことは、違うこともよくあります。なので、相手が障害者であろうとなかろうと、最後まで相手の話を聞き、途中で奪わない方が良いなと思いました。…後略…

やさしい日本語や、わかりやすい言葉について、私は『世にも奇妙な物語』の「ズンドコペロンチョ」という話を思いだした。主人公はやり手のサラリーマンで、今風に言うと「意識高い系」という性格の人物だ。彼は役員会議や社内プレゼンでカタカナ語を多用し、年配の役員を困らせてしまう一場面がある。しかし、そこで、年配の役員は、その言葉の意味を問うことができなかった。そしてその後主人公も「ズンドコペロンチョ」という謎の言葉にほんろうされるのだが…後略…